

特集発刊にあたって

大 川 嗣 雄*

今回、「子供のリハビリテーション」を特大号として送り出すことになった。

「子供のリハビリテーション」は、故高木名誉教授の「療育」という考え方にも示される通り、我が国のリハビリテーション医学の中でも最も伝統ある分野である。そこで、本特集では、過去をふりかえりつつ、現状を正確に把握し、未来を見通せるような「子供のリハビリテーション」を企画したつもりである。

先ず第1に総論として、日本における子供のリハビリテーションの過去、現在、未来を高橋孝文氏に執筆して頂いた。日本における戦後40年間の子供のリハビリテーションは、肢体不自由児施設が背負って来たといっても過言ではない。氏は日本の肢体不自由児施設のリーダー的な役割を長年にわたって果たして来た。この論の著者として最適任者である。さらに、この部分では、子供の障害に対する新しい視点からの発達診断、注目されている Seating system などを取りあげた。

次に、子供のリハビリテーションにおいて最も大きな問題である脳性麻痺を含む脳原性運動障害児を別にして取りあげた。戦後40年の間に、主要な対象であったポリオ、先天性股関節脱臼、骨関節結核などが激減あるいは消滅し、これに代って脳原性運動障害児がその主要な対象となって来た。さらに、この問題に対処するための、早期発見、早期療育というシステムが我が国に導入され、そろそろ20年を経過しようかという時点である。また、我が国独自の養護学校という体系も作られ、この中でも養護、訓練が行われはじめて10年を経過した。

* 横浜市立大学病院リハビリテーション科
Tsugio Ohkawa, MD : Department of Rehabilitation Medicine, Yokohama City University, School of Medicine.

このような状況を踏まえて、本特集では早期診断、早期療育から脳性麻痺児へのリハビリテーション本来の姿である全人的アプローチを扱い、さらに学齢期および青年期以後の脳性麻痺の現状をも反省をこめて取りあげた。

第3部は脳原性運動障害を除く主要な疾患や障害についての各論とした。我が国の現状から考えて、子供のリハビリテーション医学分野での主要なものは全て取りあげたつもりである。さらに、我が国でも近い将来大切な問題となるであろうと思われる問題にも簡単にふれた(性、骨髄移植など)。この部分で扱っている問題の多くは、脳性麻痺児のリハビリテーションとは異なった場で、日本独自のリハビリテーション・システムが出来上って来たものが多いようである。これ等の論文の多くは執筆者の長年の努力の結晶である。これ等の論文がより新しい、より高度なりハビリテーション医学への発展につながって行くことを期待したい。

第4部は施設論である。この施設論の意図する所は、施設そのものの紹介ではない。リハビリテーション医学と各々の施設との関係を明らかにしたいと考えた施設論である。我が国の子供に対するリハビリテーション医学は、一般病院や総合病院よりは肢体不自由児施設というリハ専門施設によって発展させられて来た。今までのあり方を省みて、今後のリハビリテーション医学の場を考えて頂きたい。

最後の第5部として、リハビリテーション医が知っているべき、小児科の最近の知見、話題を取りあげた。紙数の関係でいずれも短かいコラムとなってしまった。しかし、簡にして要を得た説明は皆様のお役に立つものと考え、この部分は、神奈川県立こども医療センターの先生方に負う所が大であったことを付記し感謝したい。

我が国の子供のリハビリテーションは、昭和 22 年の
児童福祉法制定以来、着実に進歩・発展を遂げて来た。
しかし、まだ多くの解決すべき問題がある。この特集

がリハビリテーション医学本来の全人的アプローチと
いう理想へ向っての一助となることを編者一同は願っ
ている。